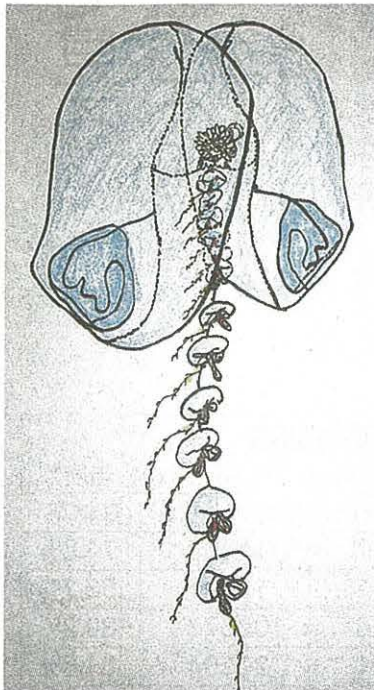


Title	日本一のクラゲ天国田辺湾(70) アイオイクラゲ
Author(s)	久保田, 信
Citation	紀伊民報 (2012)
Issue Date	2012-07-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/180205
Right	© 紀伊民報社
Type	Article
Textversion	publisher

アイオイクラゲ



次世代をつくる小さなクラゲが連なったアイオイクラゲ

(川村1915改写)

アイオイクラゲは、一生を海中で浮遊生活する終生プランクトンである。外洋性なので、繁殖の様子や成長など生活史の詳細はまったく謎のままである。

(京都大学准教授)

アイオイクラゲは全長数センチに達するほど成長する管クラゲの一種だ。寄り添って共に成長することを「相生い」という。このクラゲの母体には、文字通り二つのクラゲが向き合って成長しており、この和名が付けられた。

その二つのクラゲは透明な傘で、泳鐘と呼ばれる。これらが拍動するので海中を移動できるわけであるが、なぜかその大きさは同じではない。大きい方は長さ35センチになる。海水を出し入れするのは、これらの泳鐘の下に開いている空洞部分である。空洞は小さなホールで、内側の表面を栄養輸送用の水管が巡っている。水管はとても複雑に屈曲しており、その方が栄養摂取能力を高められるのだらう。このクラゲより小ぶりの近縁種コアイオイクラゲとは、水管の配管がシンプルになっている点で区別できる。

泳鐘が合わさった所には、それらに保護されるように大事な部分が隠されている。獲物を捕らえて食べる部分と、次世代をつくる小さなクラゲが収容されている。両者はそれぞれ多数形成されていて、お互いが長いひものようなものでつながっている。このひものようなものは伸縮自在で、まるで旗をたくさん並べたように見える。この栄養と繁殖の部分は、長く伸びると3メートルにもなる。

各単位からは毒針を散りばめた触手が1本伸びている。この触手で獲物を捕らえ、その付け根にある胃袋のような部分で食らうわけである。

また付け根からは、上述したように、1個ずつの有性世代のクラゲが形成されている。

久保田 信

70

